
すーぱぁお父さん出動

K1.M-Waki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すーぱあお父さん出勤

【Nコード】

N4477V

【作者名】

K1・M・Waki

【あらすじ】

私は松戸清次郎。会社員とは仮の姿、正体は自衛隊の特殊作業員だ。特命を受け、妻である松戸アカシアの護衛、兼暴走の抑止をしている。

妻のオーバーテクノロジーにより再改造されより強力な生体強化兵となった私は、妻の力と叡智を手にいれようとする国内外の結社や組織から彼女を守っているのだ。

今回の任務は、強力な破壊知性体を異界から召喚しようとしているモノの消去だ。

果たして無事任務を遂行できるのか……。

すーばあお父さん出勤(1)

(1)

私は松戸清次郎。サラリーマンと言う事になっている。実はただのサラリーマンではないのだが、それは、追ってわかるだろう。今、時刻は午前5時27秒前。時計など見なくてもわかる。起床の間だ。隣の妻は未だ眠っている・・・筈である。これは少しばかり自信がない。

家庭での私は、よき夫であり、よき父であり、そしてよき主夫でもある。家庭内外の家事一切は私の仕事である。逆に妻の方は家事には一切関わらず、家庭内外の事は全くと言っていいほどしない。こんな事は世間では珍しい方なのだろうし、中には妻に激怒する者、私に同情する者などもある事は分かっているつもりだ。だが、私にとって、この程度のことは能力の何千分の一も使わない取るに足らないことである。私がこの家でやるべき仕事 最も重要な事は別にあるのだし、そのためにこそ私がここに居るのだから。

今日も、いつもの日と変わりなく家事を始める。掃除・洗濯・炊事・服飾・等等。私にとっては文字どおり、朝飯前のことである。いや、眠っていたとしても出来ることだ。子供たちを起こし、食事をさせ、片付けをし、昼食や弁当を整え、場合によってはごみを棄てる。そして、『会社』へと出勤する。いつもの事だ。家から徒歩で駅へ、そして電車に乗り、職場へと赴く。本当は職場まで自分の足で走った方がはるかに短時間で到着するのだが、普段は目立った行動はしない事になっている。

私の職場は御殿場市内にあるM電機である。ほとんどの者は、最寄りの駅からさらに車かバスを利用するが、私は歩く事になっている。

普通の人間には根を上げるような距離でも、私にとってはどおつてことはない。

職場での私の肩書きは、『電子機器開発部 技術副主任』と言う事になっている。といつても、部下やパートナーがいる訳ではないので気楽なものだ。時折、社内の打合せで新規技術を発表する以外は、会議などへの出席義務もないので、社内でも私の存在は稀薄なものになっている。このM電機には、私のような立場の 半分幽霊のような 窓際族が幾人が勤めているのだ。

入社した私が最初になすべき事は、上司への報告である。といつても、完全なレポートを提出する訳ではなく、決まりきつた事を口頭で報告するだけなのだが……。いつものように部長室の扉をノックし、そして入室する。室内に巧妙に隠された自動機械によるセキュリティチェックが済んだ後、部長の待つ更に奥の部屋に出頭する。背後の扉が音もなくロックされるのを振り向きもせず確認すると、私はいつもの通り報告を行なった。

「0925時、松戸二佐、定時報告に参りました」

「いつもながらきつかり時間通りだな。1秒も狂ってはおらんよ」

電子機器開発部長こと多野倉一佐は、電子懐中時計をわざとらしく眺めながら、ややイヤミを含んだ口調で机の向こうからこう応えた。

「長い間君達と付き合ってるが、いつもながら感心させられるよ。

私のような、普通の人間には真似の出来ない芸当だな」

「報告します。昨日1830時から本日0730時までXA-01、及びガードシステムに異常無し。以降の観察と護衛を澁谷二佐と葵三尉に引き継ぎました。以上です」

「うむ。いつも通りだな。・・・周辺の動きも特に問題ないだろうね」

「はい。今のところ、問題はないようです。ただ、・・・二週間後にある運動会 地区体育祭で何か仕掛けてくる可能性が、62.7%の確率であります」

「そうか・・・、確か自治会の役員の中に公安の者がいたな。そのスジを通じて調べさせておこう。・・・そう、それから二課からの情報だが、CIAから新たなエージェントが送り込まれるらしい」

「3軒先のホワイト夫妻ですか？」

「いや、2丁目の青木氏のところにはホームステイだそうだ」

「あそこは『銀河救世会』のはずですが」

「どうも手を組んだらしいな。警戒をしておくべきだろう」

『銀河救世会』はキリスト教と仏教を足したような新興宗教団体だ。いや、正しくは新興宗教的経済団体だが。キリスト教的末法思想と修行を教義の中心におき、教祖の予言の成就 地球と銀河系の浄化 のためには戦いも辞さないとしている。その上、教義達成のためには手段を選ばない 主義主張の異なる者達との共闘も、その後の裏切りも許される のだそうだ。また、世界規模の宗教ネットワークを通じた武器の生産と売買も手掛けている。未だに武器輸出が外貨獲得の大きなウエイトを占めている世の中だ。利害が一致すればCIAとの協調も有り得ない話ではなのかも知れない。もともと、どっちも上辺だけのものには違いは無いだろうが・・・。

「わかりました。チェックしておきます」

「頼む。それから・・・悪いが、今から『出張』して貰えんדרうか」

「何でしょう」

「H 駅前に異常な重力波と地磁気の乱れが観測されている。それだけならまだいいのだが、瞬間的に超高密度の霊子渦動流が発生しているらしい」

「らしい・・・ですか？」

「そうだ。高層圏浮遊観測機から送られてくる数値はレベルD以下なのだが、特務情報第四班からの報告では、強力な結界で封じているとの事だ」

情報戦略自衛隊 特務情報工作部隊 第四班は、別名『靈能部隊』と呼ばれている。靈的能力を用いて、情報収集や攪乱を行う事を主

な任務としている。彼らの能力を考えれば、まず信頼していい情報だろう。

ちなみに、特務情報第一班が潜入捜査によるスパイ活動、第二班がメディアを利用してのデマやマスコミ操作系、第三が電能部隊で、第五はエスパー部隊、第六班が薬物・科学機器の開発・運用部隊である。

それとは別に存在する、テロや暗殺、破壊工作といった実戦系の部隊が、我々の特務戦闘工作部隊である。もつとも、私の今の任務はその中でもかなり特殊な部類に入るのだが……。

「君にやって欲しいのは、現場へ行って原因を除去する事だ」

「除去ですか？ 確認、もしくは解明では……」

「いや、除去だ。特務情報第四班は、既にエキスパート2名を失った。次元解析コンピュータのはじき出した危険指数は、 2.85 ± 0.37 ギガカタストロフだ。間違いなく、あそこで何者かが、異界からの召喚を試みている。それも生半可なものじゃない。多分、特A級以上の破壊知性体だろう。呼び出そうとしている方の力も、並じゃない」

「分かりました。すぐに向かいますよう」

「済まない。本来なら、陸自や公安の協力を仰ぐべきところだが、なにぶんにも時間が無い。あいつ等を説得する間にも、結界から召喚物が出現するかも知れんのだ」

「わかっています。それに、彼等がいては私も動きづらいですから、特務情報第四班が隊員を失うなんて、通常では考えられない。相当の能力の持ち主と見ていいだろう。一般的な訓練しか受けていない陸自の連中などがいては、返って足手まといになる。」

「火機は使用してよろしいでしょうか」

「うむ……、そうだな、結界内ならいいだろう。出がけに受け取れるよう、総務に言っておこう。……通用すればの話だが」

「後は、自前の装備で何とかなるでしょう」

「相変わらずの手弁当だな」

「家内の持たせてくれた『モノ』ですので」

「そ、そうだったな……。そ、その方が、頼りになるだろう」

一瞬、恐怖の表情を隠しきれなかった多野倉一佐は、それを取り繕うようにそう付け加えた。

「もし、それでもご心配なら、『健雷神』にバックアップして貰うよう要請しておいてください」

「む、無茶を言うな。『健雷神』は、今、紅海へ向かっているところだぞ。長距離弾道射出母艦の大遠距離マストライバーでも射程外だよ。それに、君もわかっているだろう、『あれ』の使用承認は、金輪際下りんよ。……では健闘を祈る」

(2)

部長室を出た私は、事務室の机に戻ると、2・3の書類を処理する事にした。別に今日やらなければならぬようなものではないが、今すぐに『会社』の総務部に向かっても、準備がまだに違いない。いつもの300倍くらい念入りに時間をかけて処理を追えた頃、私は席を立った。総務部では、係りの女性が、いつもの窓口にアタッシュケースと社用車のキーを用意して、私のデスクに内線電話を掛けるところだった。

私は、目だけの合図でそれらを受け取ると、そのままビルの地下駐車場を目指した。札番号から割り当てられた車を見つけ出す。駐車場に置かれた車は、どこからどう見ても、ごく普通の乗用車だが、一見柔そうな車体の裏側は、特殊鋼板と耐熱・耐衝撃ゲル化材で裏打ちされ、表面には耐電磁塗装を重ねてある。安物の装甲車よりは、よっぽど頑丈だ。

後部トランクを開けると、ごくありきたりのゴルフバックとボストンバッグが入っていた。バッグの上からそれぞれ一撫でして、装備を確認する。流石によく手入れがしてあるが、40mm対アーマーライフルは使えそうになかった。恐らく装弾口裏に傷がある。こ

れでは4発が限度だろう。私はトランクを閉じた。

一応、車内を一瞥して異常無しを確認すると、助手席にアタッシュケースを放り込み、運転席についた。そんな事は、ここに来る前からわかりきっていた事なのだが、未だに大昔の癖が抜けない。『三つ児の魂百まで』と言うが、その通りである。

私は、車内でアタッシュケースを開けると、目的地と装備の再確認をした。アタッシュケースからは、やや太目の万年筆のようなものを3本だけ取り出し背広の内ポケットに滑り込ませると、残りはそのままにしてケースを閉じた。多分、他は使えないだろう。私は車を駐車スペースから出すと、地上へのランプを登った。ゲートをくぐって公道へ出ると、目的のH駅前を目指した。

H駅前に着いたのは午後1時を少し回った頃だった。東京程ではないにしろ、地方では比較的大きな街の中心には人が溢れていた。車は既に駅前通り近くのパーキングタワーに預けて来てある。

私は駅前の売店で紙パックの牛乳とスポーツ新聞を購うと、噴水脇のベンチに腰掛けた。何食わぬ顔でスポーツ新聞を開くと、内容に目を通す。ふむ、今年のペナントレースは先がよめないな。息子と約束した巨人戦が荒れ模様になりそうだ。

すぐ近くでは、アベックがいちゃいちゃと下らない話を繰り返している。耳障りな独特のイントネーションの会話が延々と続いている。私は、彼らに一言二言文句を言うと、睨みつけた。彼らは不満気に私を見返したが、更に睨み続けるとそのまま駅の方へ歩いて行ってしまった。駅に入る直前に、一瞬、男の方が私を振り返った。澄んだ目をしている。まだ若い彼等には、今度の仕事は荷が重かるう。

彼等も含めて数人がこの場から遠ざかるのを気配だけで確認すると、私は紙パックの牛乳を口に含んだ。そのまま上げた目線の向こうには、噴水を挟んで反対側に円筒型の交番が建っていた。中には二人ほど、警官が詰めている。私はスポーツ新聞を丸めてアタッシュケ

―スに突っ込み、代わりに小型の地図帳を取り出すと、交番へと向かった。

(3)

交番に入った私は、やや古びた地図の一角とメモを見せた。メモに記された位置を確認してもらう様に頼むと、交番の巡査は快く応じてくれた。彼らは、奥の引出から大判の住宅地図と擦り切れたノートを取り出して、あちこちを捲り始めた。その間、私は交番の丸椅子に腰掛けると、縦長の出入り口から外を眺めていた。目を半眼にし眉根に意識を集中していくと、駅前を歩く人々の姿が徐々に揺らいでいく。更に気を込めると、交番の外の景色は、そのまま陽炎のように揺らいで影が薄くなってしまう。そう、ここが結界内と現界とを結ぶ接点であった。

『会社』で聞いた時の出現点からは、若干はずれているようだ。やはり、あのアベックに扮した隊員からの情報通り、結界の本体がゆっくりとだが移動しているに違いない。ただし、現実界との接点はある程度固定化されていなければならないはずだ。それは、結界内で召喚したモノを現実界側に導くためなのだが、こちらとしてもそこに付け入る隙がある。

「分かりましたよ」

先程の警官が、にこやかに話しかけて来た。その笑顔も、口調も仕事も、オーラの分布さえも、さつきと何一つ変わりはない。ただし、一つだけ違っていている特徴があった。それは、彼等はまだ人間ではないという事である。

交番の外の人波は、今ではほとんど影を失って幻のようになってしまっていた。それと呼応するように、二人の警官の姿も二重写しのように輪部を不鮮明にしていた。結界内でも彼らの姿は警官のままであったが、その表情は冷たい無機質なモノに変貌しつつあった。

「おもちゃにしては、良く出来ているな」

私は正直に感想を述べたつもりだったが、それが彼らには気に入らなかつたようだ。

「貴様も仲間の後を追うがいい」

結界の番人は何の説明もせず腰のニューナンプを抜くと、唐突にこう宣言して、こちらに銃口を向けた。見た目は旧式なりボルバーだが、結界の入口の番人に持たせてある物である。外見だけを真似た全くの別物と思つた方がいいだろう。とは言つものの、特務情報第四班の隊員が、こんなオモチャでやられたとは到底考えられないのだが……。

「くらえ」

と、短く言つると同時に撃鉄の降りる音が小さく鳴つた。それだけだった。銃声も弾丸の発射された気配も無い。空砲ですらなかつた。だがしかし、私は左腕に痛みが走るのを覚えた。実際に背広に血の染みが広がって行く。

「少しは驚いたか？ 霊子の波動関数だけで構成された弾丸だ」

「霊的・物理的な相互作用をすり抜けて、霊体・幽体に直接ダメージを与えることが出来る。それは、物質的な肉体にもフィードバックされて、痛みを伴う傷となるのだ」

「ふむ。ダメージ・・・と言つよりも、負の霊子エネルギーの存在確率密度関数を飛ばす訳か。飛来する速度は、ほぼ光速度に匹敵するな」

「その通りだ。我々の戦闘反射速度とこの距離を加味すれば、どんな超人も避ける事も遮る事も出来まい」

「更に、ここには結界生成に伴つて、空間にフィルターを掛けてある。瞬間移動も出来ぬぞ」

なるほど。これでは如何に霊能部隊とて、防御する術はなかつただろう。それに、彼等は基本的には戦闘部隊ではない……。

「貴様も、全身を穴だらけにされる苦痛と霊体の拡散で、狂い死ぬがいい」

「その前に、君達がここで何をやっているのかを教えてくださいませんか」

な？」

こんな状況の中で、私はいけしゃあしゃあと訊ねた。それも、彼等には気に食わなかったらしい。

「そんな事は知る必要は、ないっ！」

再び撃鉄をおこすと、徐々に引き金を引き絞っていく。こちらがとうてい避けられないと分かっている、見せつけているのだ。ふむ、こういうところは意外に人間臭いな。『おもちゃ』という前言は撤回しなければならぬかも知れない。

たつぷり30秒もかけて、再び撃鉄が下がった。わずかな間をおいて、カチリという音が2つ鳴った。そして、異界の交番に絶叫が響いた。

すーばあお父さん出動(2)

(4)

その男は霧の中に座っていた。霧というよりも水の中と言った方が近いぐらいの、濃密で不透明な空間であった。

少し気を抜くと、足元の地面の存在すら希薄になって奈落の底へ引きずり込まれてしまいそうだ。いや、実際に今ある地面の感覚は、私自身の意識が作り出しているものだ。その意味では、ここはある種、幻想の中の精神的世界といえるかもしれない。ここでは、精神力の弱い者は存在さえできないだろう。自分自身を構成する物質の波動関数　存在確率が発散してしまうのだ。逆に強い意思の力を持つモノは、あらゆる事が可能になるに違いない。奇跡を起こす事もできるだろう。

如何に術者の能力が高く高度な結界を構成しようとも、元々は通常空間の一部であった以上、このような異質な空間を維持することは、とうてい不可能に近い。かなり異空間の属性に浸食されているようだ。これは、呼び出されるモノの出現が近い事を示している。事態は一刻を争う。

私が遠くに見える男へと歩みを進めようとした時、
「よく、ここまで来れたものですね」

と、『目の前の男』が言った。彼我の距離は瞬間的に近づいたらしい。ここでは距離の感覚も、あまり意味を持たないのか・・・。

私は何も答えず、その男を観察していた。

若い。一見、20才代前半にしか見えない。しかし、だからと言って幼く見える訳ではない。やや長髪の黒髪を、うなじで束ねてある目も黒い。印象としてはモンゴロイド、それも漢民族系の顔立ちだが、上品でほっそりとして落ち着いたその顔つきや、やや蒼味のかった肌の色からは北欧系の血も入っているように見える。漆黒のク

ラシックなタキシードと細い蝶ネクタイも、同世代の『普通の美男子』が着れば気障にしか見えないが、彼の場合は完全に体表の一部のように着こなしている。その辺の若人とは根本的に人間の品格が違うのだ。成り金とは異なり、最初から血の中に気品が溶け込んでいる。

座しているのではつきりしないが、背は高そうである。多分、190cmはあるだろう。通り　いや、ストリートを普通に歩いただけで、若い女性が群がるに違いない。

「召し使いたちには、お客様方のお相手をするようにと申し付けておいた筈ですが、・・・はて？　彼等が、何か阻喪を致しましたか？」

男が不思議そうに訊ねた。

「この事か」

私は、右手を開いて彼に見せた。そこには小さく干からびたタツノオトシゴのような生物の残骸が6匹乗っていた。どれも、頭部や腹部に損傷が入っている。そう、これが結界の入り口を守護していた警官や、その後に襲って来た戦士達の正体だった。

「ほう・・・、これはこれは。ぼくの『ヨーマノイド』をこのようにしてしまうなどは、・・・初めて見ました。一体どうやったのですか？　特に入り口の二人には、それなりの道具を持たせておきました筈ですのに。是非ともお聞かせ下さいませんか？」

「あの武器か？　なかなか面白いモノだな」

「あれが通用しない方がいらっしゃるとは、到底考えも及びませんが・・・」

端正な顔に深刻な表情が現れた。本気で悩んでいるように見える。「おまえにも、あんなおもちゃが通用するのか」

「なるほど！　確かに」

彼は左の掌に拳を打ちつけると、合点がいったと言う顔をした。

「あの程度の弾など、何発当たったところでびくともせん。通用しないと知って、ひどく驚いていたぞ。どうせ、本物の警官のドッペル

ゲンガーと混合して作ったんだろ。やけに人間臭かった。動揺したところを攻めたら、あつという間だったな。素手だったが、むしろ、後から現れたモノの方が手強かったぞ」

私は、ありのままを語った。その間、青年は眼を輝かせて私の話に聞入っていた。

「こんなおもちやに身の回りの世話をやらせているのか？ よく我慢出来るな」

そう言つて、私は掌を握り締めた。タツノオトシゴモドキが粉々になる。

「いえいえ。彼等には、専らお客様の接待をさせておりました。ぼくの身の回りは、また違ったモノがあります」

「大した違いはあるまい」
「さようで」

男はクスリと笑つた。嘲笑ではなく、照れ隠しと言つた笑いだ。

「ぼくの考えていた以上の御方の様だ。この国もまだまだ捨てたものではありませんね。是非とも、御名前を御聞かせ願えませんか？」

「人に名前を訊く時は、まず自分から名乗るものだぞ」

「確かに。これは失礼を致しました」

すぐさま彼は立ち上がると、自らの名を名乗った。

「お初にお目にかかります、ぼくは、暗黒丸。左道 暗黒丸と申します」

予想に反して、返ってきた名は至極日本的なものだった。しかも、
「左道一族の者か……。ならば、呼び出すモノは『耶伽嚙素斗』だな」

「よく御存じで」

左道一族。左道とは外法、邪法の類を意味する。西洋的な言い方をすれば黒魔術の事だ。彼等の奉ずるのが、耶伽嚙素斗と呼ばれる邪神とそれに連なる神々である。耶伽嚙素斗は九頭竜神や馬須佐兜羅、狗濤愚羅と並ぶ、超古代に隠され封印された、神 未知の知性体の一つと伝えられている。破壊鬼皇など足元にも及ばない超A

級破壊知性体だ。

幸いなのは、彼等がこの三次元世界とはあまりに異質なため、実体化するためには複合型積層多重結界によるコーディング処理と莫大な維持エネルギーが必要になる事、そのために長時間実体化している事が出来ない事だ。

それでも、出現した瞬間に日本中の人間が発狂するのは間違い無い。おそらく、そのうちの6割は10秒以内に死んでいるだろう。たとえ何もなかったとしても、存在そのものが危険なのだ。

「さあ、ぼくは自己紹介を致しましたよ。今度は貴方の御名前を御聞かせ願えますか」

私も名乗ることにした。普通は名乗らないのだが、この期に及んで隠すような事ではあるまい。

「防衛省 情報戦略自衛隊 特務戦闘工作部隊 別班、松戸清次郎 二佐」

彼の顔が一瞬驚いた表情を見せた。

「まさか・・・貴方が・・・なるほど、それでは結界に配置した程度のヨーマノイドでは歯が立たないのも道理です。せいぜいが、特戦機動部隊あたりだろうと思っていきましたが、『清らかな松戸』が相手では五分と持たなかったでしょうね」

「隠蔽用の防衛結界に信頼をおきすぎたな。敗れたとはいえ、特務情報工作部隊の力を甘く見るな。的確な情報収集が出来ていれば、それ相応の判断も出来る」

「ふむ、・・・ぼくも今回は結構凝った結界を作りましたし、我ながら出来もいいと思っていきましたが、・・・少々有頂天になり過ぎていたようですね。まだまだ修行が足りません」

彼、暗黒丸にしてみれば、結界の存在までは見破られても、何をやっているかまでは分からない。と言うよりも、大した事はやっていないように見せたつもりだったのだろう。彼の最大の失敗は、特務情報第四班の隊員を殺してしまった事だ。それだけの力を持つモノが、ちょっとした事をしているはずが無い。

もつとも、情報戦略自衛隊の7つの特別戦闘機動部隊は全て出払っていた、という事情もあるし、こんな街のご真ん中に強襲弾道移送コンテナ『別雷神』を打ち込む訳にもいくまい。

「その程度の修行の成果として、耶伽嚙素斗の召喚を行うなどは止めておくことだな。それとも、私が修行をやり直してやろうか」

私の挑発に対しても、彼はにこやかに応えた。

「それも非常に魅力的な提案ですね。ですが、我が主をこれ以上待たせる訳にも参りません。ここはどうでしょう、何もなかったと言う事で見逃していただけないでしょうか？」

「よくそんな事が言えるな。耶伽嚙素斗がちらとでも顔を覗かせて、何もなかったで済ませられる訳が無い。おまえの方こそ、これ以上馬鹿げた召喚など止めて、ニューヨーク辺りで占いとかをするか、いつその事芸能界にデビューしてみたらどうだ。どちらにしても、金も名声も手に入れられるぞ」

「なるほど！ 確かにぼくの容貌と魔道の力をもつてすれば・・・、いやいや容貌のみでも充分過ぎるぞ。ならば・・・」

左道は、本気で悩みはじめたようだった。このまま召喚を諦めてくれると助かるのだが・・・。

「そうかつ」

いきなり左道が叫んだ。

「我が主を召喚してから後、芸能界入りをすればいいんだ。これで万事丸く収まりますね」

「そんな訳がなかつ。耶伽嚙素斗の破壊した世界で、誰がおまえのファンになるのだ」

「・・・困りましたねえ。取り敢えず、貴方がぼくのファン一号と言うことではいけませんか？ 貴方なら、主と対面しても平気でしよう」

「そんな事が通る筈がなかつ」

本気なのか冗談なのかはつきりしないが、耶伽嚙素斗の召喚を中止する気はないようだ。

「飽く迄も耶伽嚙素斗を呼び出すと言うのなら、こちらも実力行使をするしかないな」

「うーむ、交渉決裂ですか。いい案だと思ったんですけどねえ。・
・それでは仕方ありません。ぼくも、主の召喚を中止する訳には参りません。それに、一度、ぼく自身の目で、貴方のお力を拝見しておきたいと思えますし・・・」

「ならば・・・、やるか」

「いえ。貴方のお相手は、ほれ、あそこに」

暗黒丸が、あごをしゃくつた方から、2人の戦士がとけ出すように現れた。それと同時に、私と暗黒丸との距離が遠くなった。この空間の支配力は、彼の方が上の様だ。

(5)

「・・・そのヨーマノイドは、こんな時のために特別に調製しましたモノ達です。先刻お相手したヨーマノイドのようにはいきませんよ。願わくば、この次も生きている貴方とお会いしたいものですね」
「よく言う・・・」

私は、眼前の2人を注意深く観察した。双子の如く、何から何までそっくりであった。彼等も結界の入り口で待ち構えていたヨーマノイドと同様に、見た目には普通の人間である。

衣服はほとんど着けていない。わずかに腰の回りを布が覆っている他は、両の手首と足首に幅広の赤っぽい金属と思しきサポーターを巻いているのみである。それだけで尋常の相手ではない事が知れる。

鎧兜の類の防具類は、確かに敵の攻撃を防ぎ急所を守る意味で重要ではあるが、その重さや拘束感によって、返って動きが抑えられてしまう。更に、防具を着けていると言う安心感が、油断や隙きを生む事すらある。達人同士の戦いでは、防具類などは返って邪魔なだけなのだ。

「わたくしは、アルファ」

「わたくしは、オメガと申します」

と言っても、どっちがアルファだかオメガだか見分けが付かない。左道もきつと区別していないのだろう。便宜上の名前かも知れない。「我々自身は、貴方様には何の恨みもありません。主人の命により戦い、勝利する事のみです」

オメガと名乗った方が言った。強力な意思のこもった言葉だった。先に戦った木偶人形とは桁違いにレベルが違う。

生体だろうが機械だろうが、それ以外のモノだろうが、戦闘破壊能力があるレベルを越えると、武装や筋力（出力）はあまり重要ではなくなる。それに代わって意思の力が重要になってくるのだ。どんなに強力な戦闘破壊能力を持つと、意思の力を持たぬモノは、ただの爆弾や銃弾と同じである。それ相応の対処さえすれば、た易く処理出来る。しかし、そこに高度で強い意思の力が加わると、その戦闘力・破壊力は数桁のオーダーで倍加するのだ。それ故、高度で強力な戦闘体は『破壊知性体』と称されるのである。眼前のモノ達は、肉体的な戦闘力以上に、強力な精神力を付与されているに違いないようだった。

「武器はお好きな物をお使いください」

アルファの指差した方に、各種の武器が無造作に山と積み重ねられていた。大小様々な刀剣、槍の類から、銃器類、果ては戦車や戦闘機、戦闘用サーボ、スレイブまでそろっている。

「お前達は何を使うのだ？」

「あなたに合わせます」

「本当に何でもいいのだな」

私は敢えて念を押した。

「御随意に」

私は武器の山に近づくと、その一角から一本の棒のような物を引き出し出した。見た目には、長さ50cm、太さ3cm位の寸胴の棒である。材質は木材とも石材とも取れるような、見た目と手触りで

あつた。アルファ&オメガの顔が一瞬曇る。

「まさか、それを手にするとは……。流星は主人の見込まれた方です」

「『ヘリオスの宝剣』まで置いてあるとはな。正直言つて、驚いているよ。勿論、本物だろうな」

「本物です。……ですが、あなたに使いこなせるでしょうか？」
「やってみなくては分からんさ」

私が手にした棒　ヘリオスの宝剣は、持ち主の生体プラズマエネルギーを変換し、局所場によって形成されたフィールドに封じ込める機能を持った、一種のコンバーターである。端的に言えば、オーラソード発生機と言う訳だ。持ち主の力量によつては、山を切り裂く事も、海を蒸発させる事も出来る、強力なアイテムだ。

欠点は、宝剣自身にはジエネレータを内蔵していないため、全エネルギーを持ち主に頼つてしまう事と、コンバーター内には原理的に出力コントローラーの類が組み込まれていないため、不用意に使用すると持ち主の生体エネルギーを際限なく吸い出して使い切ってしまう事だ。並みの人間の体力での場合、ものの数秒で生体エネルギーを使い果たしてミイラになってしまうだろう。一歩間違えば、自滅してしまいかねない、まさしく両刃の剣なのだ。アルファが言った、『使いこなせる』かどうかと言うのは、そういう事である。

「お前達は何を使う？」

「我々はこれを使いましょう」

彼等も、それぞれが手にした武器を示した。

アルファはやや長めの三叉戟を、オメガは短剣の柄にワイヤー状の鞭を結んだ物を手にしていた。

「ふむ。『ポセイドンの矛』と、そつちは『ヘラの鞭刃』か。どちらも、生体プラズマで起動する武器だな」

「御存じですか」

オメガが感嘆の声を漏らした。

「少しはな。まあ、名前程度だが」

私は多少謙遜して言った。

「流石……。主人の命に関係なく、戦いたくなってきました」
なるほど、単なる人形ではなく、自由意志を持たされているのか。それも、破壊マシンとしてのそれではなく、武人としての高貴な精神だ。手短には終わりそうに無いな。

「では、わたくしから……」

アルファが一歩前に出た。

「二人一緒ではないのか？」

オメガの顔が一瞬曇った。口を開きかけたところを、アルファが制し、

「まずは、お手並み拝見からです。……もつとも、続きがあればの話ですが」

口調が挑むようになっていたが、簡単には挑発に乗ってこない。戦うために創られたモノだけはある。

「そうか……。ならば来い！」

(6)

私と10mほどの距離を置いて対峙したアルファは、三叉戟を左斜め下に向けて構えていた。伝承が本当であるなら、ポセイダンの矛は6〜7mの有効圏を持つ。アルファの戦闘力は、さっきのヨーマノイドをはるかに凌ぐと考えられるから、残り3mの間合いなどは無いのと同じであろう。一方のオメガは、彼の後ろに下がっている。彼の持つヘラの鞭刃は伸縮自在の鞭を持っている筈だ。この距離でも十分に射程距離内であるが、オメガは武器を足元に置いて腕を組んだままだ。取り敢えずは一對一でやらせるつもりらしい。もつとも、いざとなったら加勢をする可能性がある。その意味で、長射程のオメガが次方になったのは、戦略的に正しいと言えた。

私の方はいえ、ヘリオスの宝剣を左手にしたまま、その場に無造作に立っていた。

「構えなくてもよろしいのですか？」

アルファが訊いてきた。

「まだ、ゴングは鳴ってないようだが」

「先程の貴方の言葉がそうではなかったのですか？」

「そうとも言えるかな」

そう答えて、私は苦笑した。アルファもかすかに笑みを浮かべた。「宝剣を発生しておかないと、わたくしの攻撃は受け止められませんが。ヘリオスの宝剣ほどではありませんが、ポセイドンの矛も生体プラズマを変換して刃に変えられます。あらゆる物質を切断出来てしまうのですよ」

そういうと、三叉戟の矛先が、淡く赤く、ほの光り始めた。

「伝承通りであればな。まあ、こう見えても毎日サラリーマンとして働いているので、結構疲れているんだ。あんまり、無駄なエネルギーを使わせないでくれないか」と、私はわざとらしく言った。

「そうですか。では、・・・参ります」

アルファがそう宣言した途端に、あたりに殺気が満ちた。しかも強烈な。背広を通して肌がびりびりする。

一瞬、アルファの姿が霞んで揺らいだかと思うと、次の瞬間にはまた元通りになった。と、常人には見えなかったかもしれない・・・。

「次は二人一緒でもいいぞ」

私の言葉に、アルファが奥歯を噛み締めていた。構えはそのまま、眩くように言った。

「流石・・・。あの一瞬だけに、オーラソードを発生させて攻撃を凌ぐとは。しかも、そのパワー、発生タイミング、非の打ち所がない。並みの精神力ではありませんね」

残像を残したまま超高速で移動したアルファが、私の右後方から切りつけるのを、瞬間的に発生させた宝剣で弾きかえたのだ。

刃を交えるその一瞬だけに集中し、適切なパワーでソードを発生させる。これが、使う者の生体エネルギーを際限無く消費するヘリ

オスの宝剣を使用する場合のセオリーだ。だが、そのためには極限の集中力が必要だ。ぎりぎりまで、丸腰でいる事に耐えなくてはならない。

「小手調べとはいえ、わたくしの攻撃に無傷でいたのは、あなたが初めてです」

「では、正式に試合開始といくか？」

後方のオメガも、いつの間にか武器を手にしている。

「待て。今一度試したい」

アルファは、進み出ようとするオメガを制した。

「正々堂々、と言うわけか？」

「いえ。主人には、どのような手段を使っても、全力で貴方を倒すようにと仰せつかっております」

「ふむ……ならば、二対一の方が確実だろうに」

「ですから、『手段を選ばず』に戦わせていただいております」

アルファの顔に薄い笑みが浮かんでいる。一方、オメガの方は、やや仏頂面だ。本当は、彼も戦いたくてウズウズしているのだろう。「変わっているな」

私は、何故か、この二人（二体？）を好ましく思うようになっていた。

「今度は本気を出しますよ」
アルファが矛を構えた。

すーばあお父さん出動(3)

(7)

アルファは矛を左斜め前、やや下向きに構えている。対する私はいえ、両手を自然に垂らしたまま。宝剣を左手にしてはいるものの、一見、無防備な自然体である。

「お手やわらかに頼むよ」

「そのお言葉、そっくりそのままお返しします」

アルファの顔から笑みが消え、能面のようになる。それと同時に、猛烈な殺気が吹きつけてきた。こいつ、本気で殺す気である。

常人であれば、それだけでショック死してしまいそうな殺気の中に、私は平然と立っていた。彼の殺気は、私に触れることもできずに、周囲を避けるように廻り、霧散するだけだった。

だがどうだろう、我々をとり巻く異空間は殺気を怖れるかのよう、ざわつき、うねくり、身をよじらせていた。忘れてはならない。境界内のこの空間は、精神の力で、その性質を大きく変えるのだ。

「はっ」

かすかな吐息と共に、アルファが地を蹴った。真正面に矛を突き出し、一直線に突進する猛烈な突き。単調な一発の突きに見えるそれが、実は何百発もの連続突きの集合であることを、私は看破していた。連突きは、矛のみならず周囲の空間をも巻きこみ、超高速で振動する巨大な刃と化している。その前では触れただけで、いや、すぐ傍をかすめただけですら、あらゆるものが分子振動を励起されて分解されてしまうだろう。

避けられるか？

否！

私は、自身の身体が重くネバつく空間に捕えられていることに気づいていた。周囲の殺気が私を抑えつけているのだ。同時に、重力が強力に私の手足の自由を奪う。

元よりここは、異空間の特性を帯びた結界の中。しかも、それを生成しているのが敵方なのだ。アルファはああは言ったが、自分以外の全てのモノが敵に加勢する。

「それも、ちょうどいいハンデか」

彼らに私の呟きが聞こえたのかどうか……。

彗星の如き超高速の連突きが、成す術もない私を貫いてアルファの身体ごと突き抜けて行ったのは、ほんの一瞬後の出来事だった。

「……さすがです。この技が破られたのは、貴方で二人目です」
「お誉めに預り高栄至極だよ」

先程とうって変わらず、その場に立ち尽くしたままの私は応えた。あの僅かな一瞬の間だけ、私は自分を限りなく無に近づけた。この空間では、精神力でもって自己の存在を維持しなければならぬ。ならば、逆を行えば、……自分の存在は空気の如く霧散してしまうだろう。問題は、アルファが通りすぎた後、自己の復元が可能かどうかだ。……結果からするとそれは可能だったようだが、一歩間違えば、そのまま消えてなくなってしまうところである。私でなければ、復元は不可能だったに違いない。

「もちろん、もう一人は、我々の主人ですが」

こう答えるオメガは、既にヘラの鞭刃を手にして元の場所に立っていた。結果的に、私は彼等に挟まれた形になってしまった。

「さて、これで私の実力がわかっただろう。おまえたちは、自分の能力は自分でわかっているはずだ。ならば、結果は闘わずとも分かる。……おとなしくここを通してくれないかい」

一瞬、アルファとオメガの顔が悲しげに曇ったように見えた。

「それは出来ぬ相談です。我々は、主人の命に違う訳には参りません」

「それに、貴方のお力は主人に匹敵するかも知れませんが、我々の力が主人に劣っているとは、一言も申してはおりませんし」
「さて、それは困ったな・・・」

やはり、『何事もなく』と言うわけにはいかないらしい。

「では、・・・やるか」

私は、やや諦めた口調で言った。

「喜んで！」

二人が答えたと同時に、私の周囲で凄まじい闘気が渦を巻いた。

(8)

二人のヨーマノイドの出す闘気は、さっきまでの殺気を越える凄まじいものであった。だが、二人の闘気は私を縛りつけようとはしていたが、こちらもそれを上回る闘気でもって、これをはじいている。刃こそ交あわせていないが、闘いはもう始まっているのだ。

さっきまで武器を使わなかったオメガは、『ヘラの鞭刃』を頭上で振り回しており、アルファは矛を上段に構えている。どちらが先に仕掛けてくるか？ アルファか？ オメガか？ 沈黙の中に、オメガの振り回す、鞭の風切音だけがヒュンヒュンとなっていた。

先に動いたのはアルファだった。ただ一步の飛び込みで、一瞬のうちに関合いを詰めると、斜め上段から矛で切りつけてきた。私は、それを宝剣のオーラソードで受け止める。一瞬、互いの動きが止まる。それを待っていたかの如く、オメガの鞭刃が背後から私を貫いた。

だが、オメガの鞭刃が貫いたのは私の残像だった。私は、一瞬前に、二人の遙か上空に飛び上がったのだ。

オメガの鞭刃が、勢いあまってアルファに突き刺さる手前で、鞭は意志を持つかのように上空へとその軌道を変える。『ヘラの鞭刃』は、使い手の意志で自在にその軌道をコントロールし、目標を貫く

のだ。鞭が私に迫る直前、私は無いはずの天上に止まるや、それを宝剣ではじき返した。

だいぶこの空間に慣れてきた。私は、自分の意思で空間を操り、天上を作り出したのだ。

だが、敵もじつとなすがままになっていたわけではない。床を蹴って跳躍してきたアルファが一瞬にして目前に迫ると、矛で横殴りに攻撃してくる。私はそれを宝剣ではじき返すと、右足でアルファを床へと蹴り落とした。そのまま、天上を蹴ってアルファに一撃を加えようとしたその瞬間、宝剣を持った右手を鞭が巻きとめた。わずかではあるが、一瞬私の動きが止まった。そこへアルファの矛が左脇から横殴りに攻めてきた。武器は絡み止められた宝剣一振りのみ。この攻撃は防ぎようがない。ここでおしまいなのか……。

(9)

アルファもオメガも自分達の勝利を確信したに違いない。アルファの矛先が私のわき腹を切り裂こうとしたその時、矛はガツキともう一本のオーラソードに受け止められた。

「何っ！」

二人ともが驚愕した。一瞬何が起こったか理解できなかったに違いない。アルファの矛先は、私の左手に握っている、『丸めたスポーツ新聞』から発生してる光に受け止められていたからだ。

「そんなバカなっ！ 紙などを使ってオーラソードを発生できるなど、聞いたこともないぞ」

「それはそうだろう。お前達は今までそんな相手とは戦ってはきていないのだから。……オーラソードの力は精神の力。宝剣はただのきつかけに過ぎない。これが、A級以上の破壊知性体の力だ！」

私は、左手でそのままアルファの矛をはじき返すと同時に強烈な回し蹴りで、彼を吹き飛ばした。同時に右手に念を集中する。

「うわぁ」

オメガが自らの武器で振り回されアルファにたたきつけられると同時に、鞭刃で共に縛りつけられた。私が念を鞭刃に流し込み、逆に操ったのだ。

「これで終わりだ。受けてみよ、超次元流の奥義を」

私は、二本のオーラソードを振り上げると大きく振りおろした。

「超次元流闘殺法、『破碎渦動流』！」

無数の微細な亜空間の破片が渦を巻き、つむじ風の如く、巻きとめられたアルファとオメガを襲った。

「ウギヤー！」

二人の悲鳴がこだまする。

「手加減はしておいた。命までは取らん」

私は傷だらけになり、血まみれの二人にそう告げた。

「むうう、何故だ。傷が塞がらん」

「いつもなら、この程度の傷など数秒で回復するのに」

アルファとオメガの苦鳴が響く。

「あたりまえだ。そのように切ったのだから。お前達はそこで大人しくしている」

「そうはいかん。我々の命は主人のもの。他の者には死んでもなびかん」

「ここで生き恥を晒すくらいなら、死を選ぶわ！」

二人は力を振り絞ってたちあがると、共に私に突っ込んできた。

何も策は無いだろうに。そこまでに左道の精神支配は強いのか・・・願わくば弟子として鍛えてやりたかったが。

「ならば、これが最後だ！ 超次元流闘殺法『亜空破断』」

巨大な亜空間の刃が、二人を共に真つ二つにした。

その死の瞬間に、アルファとオメガが「アリガトウ」と言ったよくな気がした。・・・気のせいかも知れぬ。だが、偽りのモノとはいえ、こうまでさせるのか、左道・・・、左道暗黒丸よ。許せぬ。

私は両の拳に、気がつかぬ間に大量のオーラを流し込んでいた。新聞紙は焼けて灰と化し、ヘリオスの宝剣は耐え切れずに微塵に砕けた。

行くぞ、暗黒丸。今度こそ決着を付けてやる。

私はそう決意すると、左道の居場所をスキャンし、そこに一気に移動することを望んだ。

すーばあお父さん出動(4)

(10)

オンヤガゾストマカブルグトムブルグトラナムフタグルン・・・
オンヤガゾストマカブルグトムブルグトラナムフタグルンオンヤガ
ゾストマカブルグトムブルグトラナムフタグルン・・・

濃い霧のような空間に、不気味な呪文が木霊する。それに応じて、
空間は波打ち、霧は集まっては霧散し、不気味な文字で綴られた魔
方陣の周りを渦巻いていた。

オンヤガゾストマカブルグトムブルグトラナムフタグルン・・・
呪文の詠唱が続くに従い、魔方陣の中央部に黒点が現れ、徐々にで
はあるが、それが広がりつつある。邪神『耶伽嚙素斗』の出現が近
づいているのである。

「見つけたぞ！」

私は、左道と魔方陣の位置を探知するや、そのすぐ側へ転移した。
「ついに来ましたか。あなたのお手並み、得と拝見させていただき
ましたよ。やはり、恐るべき力量の人だ。いや、もう人の領域を遙
かに凌駕している。あなたは既にこちら側の者なのですよ」

「それがどうした。きさま、『清なる松戸』のその二つ名の意味を
わかっていいのか」

「誰もあなたを汚すことが出来ない。傷つけることも出来ない。そ
の『清らかさ』を奪えないと云うことでしょう」

「それもそうだが、真の意味は別にある。・・・貴様も魔道の心得
えがあるのなら、『松戸』と聞いて、真っ先に思い出すのは何だ！」

「なに！ どういう意味です。松戸・・・松戸といえば、・・・ま
さか、『あの松戸家』のことですか！」

「そうだ、私の真の役割は松戸家当主の護衛役だ。『清らか』とは、松戸家当主の周りの異物を排除するという事だ」

これを聞いて、左道は額を押さえてよろめいた。

「まさか、あの松戸家の者とは。・・・何故今まで思いつかなかったのだ」

「きさま、記憶を制御されているな」

私がこう告げると、左道は啞然とした顔でこちらを向いた。

「まさか・・・そんな。僕が、記憶制御させているなんて。・・・嘘だっ！ これはあなたの出まかせに過ぎない」

「きさまが、そう思いたいのは仕方が無いだろう。だが、それでは何故、今まで、この一番大事なコトとを忘れていた。何故、思いもつかなかった。その方が、ありえんだろう」

左道は、もはや動揺を隠し切れずにいた。

「そうだ、確かにありえない。・・・だが、僕は左道家の次代当主だぞ。それが、記憶を操作されているなんて、・・・どうしてだっ」
左道はあからさまに動揺し、声を荒げた。

「それは私にもわからん。だが、このチャンス、活かさせてもらおうぞ」

私はそういうと、内ポケットから万年筆状の棒を3本取り出し、真ん中で折り、6本にした。五芒星魔法陣には、六芒星結界だ。私は、6個の結界針を魔方陣に投げつけた。

「超次元流封殺法『六芒封結界』」

投げられた結界針は五芒星魔方陣の周りに突き刺さると、光だし、相互に光の線を描き出した。瞬時に完成した二つの三角形が、五芒星魔方陣を覆い隠すように重なりと光を放ちだした。それと共に、魔方陣の中心の穴の広がりが止まる。即席の結界だが、左道を倒すには十分な時間を稼いでくれるだろう。

「し、しまった！ これでは我が主が出てくる前に、主の結界コーティングのタイムリミットが尽きてしまう。・・・やっつけてくれまし
たね」

「千載一遇のチャンスだったからな。後はお前とこの結界空間を処分すれば、私の任務は完了する」

私は、結界が魔方陣を押しとどめている時間を5分と計算した。この短い間に、左道を始末すればこちらの勝ちだ。未だ若く惜しい人材だが、世界の平和のために消えてくれ。

「もう許しませんよ。今度は私自らが相手だ。左道家の破壊滅法を受けてみよ！」

「望むところだ。松戸家を五千年を守護してきた秘術、超次元流で葬り去ってやる」

互いに対峙すると、どちらも闘いの体制に入った。

(1 1)

時間が限られている。ここは先手必勝だ。

「行くぞ！ 超次元流闘殺法、『雷鳴覇』」

私の両の拳から、超高压電流がほとばしる。これに対した左道は、

「左道家破壊滅法、『暗黒封殺圏』」

左道の交差した両腕から、暗黒の渦がほとばしると、雷を吸い込んだ。のみならず、それは周囲の霧を空間ごと吸い込みながら私に向かってきた。

「むう、きさまも重力を操れるのか。・・・ならば、超次元流『過重力破砕弾』」

私の右手に殴られた空間は瞬時に押し縮められ、マイクロブラックホールを形成すると、左道の暗黒の渦に向かって行った。

二人の真ん中で、二つの暗黒の渦が、それぞれ互いを飲み込もうとせめぎあっていた。

少しでも気を抜くと、相手に飲み込まれそうな、そんな状態に見えるだろう。

「ふふふ、あなたの技は、僕の暗黒で全て吸い込んであげましょう」

「侮るな、超次元流『雷竜覇』」

私は、左手を開いて横に伸ばすと、雷が竜の形を取って、波打ちながら側方から、左道を襲った。

「バカなっ。ブラックホールを維持しながら、電撃を使うとは」

「これで終わりだ」

「なにを、出でよ『邪黒狼』」

左道の影が伸びると、そこから五体の漆黒の狼が現れ、金色の竜を押しとどめた。

「やるな・・・」

「まだまだ負けませんよ」

中央では重力波のせめぎあいだが、傍らでは、影と雷が絡み合って戦う、一進一退を繰り返していた。時間稼ぎに入られたら、勝ち目が無くなる。急がなくては・・・。

すーばあお父さん出動(5)

(12)

私と左道とは共に動けず、一進一退を繰り返していった。このままでは、六芒封結界が破られ、邪神の出現を許してしまう。

「受けてみよ、超次元流の究極奥義を」

私は、重力のせめぎ合いの中心へと飛び込んだ。

「この期に及んで血迷ったか、松戸よ」

「ぬかせ。超次元流闘殺法究極奥義『超重力粉碎弾』！」

私の拳が突き出されると、重力の衝撃波が巻き起こった。それは、せめぎあっているマイクロブラックホールをも蒸発させるや、そのまま左道に突入して行った。

「まさか、こんな技まで使えるとは。防げ、左道家『虚無隔壁』」

左道の前に、薄ぼんやりした壁が幾重にも張り巡らされた。それは、虚数空間で構成された、壁であった。私は、それをものともせず、超重力の衝撃波を繰り返していった。

「おおおおお、砕け散れ、光となれ！」

左道の虚数空間壁さえも、微塵に砕き光と化した拳は、そのまま左道を捕らえようとしていた。

と、突然、光が爆散するように我々の間に割り込んできた。一瞬、目がくらみ、技が途絶える。

いったい何が起こったのか？

すーばぁお父さん出動(6)

(13)

光の輝きは私と左道の間で無定形にさまざまな形を取っていたが、徐々にそれは人型に近づいていった。私は、その輝きの放つオーラに覚えがあった。

「ハイ、ダーリン。今日は出張なのね」

光がおさまったときに現れたのは、白のブラウスと薄緑のカーデイガンを着た女性だった。

「何でまた、よりによってこんな現場にこのこやってくるんだよ」
私は光から生まれた彼女にそう言った。

「だって、あんまり暇だったから。そしたら、ヨグソトトの気配がするじゃない。昔馴染みがかつちへ出てくるのは珍しいから、ちよつとお話しにきたの。・・・ああ、お家は大丈夫よ。あたしのドツペルゲンガーを置いて来たから」

とにこやかに応える彼女こそ、私の妻にして松戸家の現当主 松戸アカシアだ。

「あらあら、こんな結界張っちゃって。これじゃ、彼、出て来れないじゃない」

そう言うと、彼女は、私の作った六芒封結界を左手の一払いで、いとも簡単に消滅させた。そのまま五芒星魔方阵の中央に歩むと、いきなり魔方阵中央の小さな穴に頭を突っ込んだ。

一方、左道暗黒丸は、その間中、腰を抜かして座り込んだままだった。恐怖の表情を浮かべ、カタカタと震えている。それも仕方ないだろう。彼は、妻の正体を知っているのだから。

魔方阵の中央に頭を突っ込んでいる彼女を指して、
「あ、あれが、そうなのか。・・・アカシアの女王。全次元を統べる超絶対の管理者なのか」

その時、妻が首を抜いてこう応えた。

「そんな大層な者じゃないんだけどね。あたし自身は、アカシックレコードをホロメモリとして駆動する超次元コンピュータの人型端末にすぎないんだから」

「だが、アカシックレコードにアクセスし、それを読み書きできる以上、彼女に逆らえるモノはただの一つも無い。全ての知識と全ての叡智を追い求めた松戸一族の作り出した、超存在だ」

と、私は訂正した。

「ヨグソトトはどうした？」

私が訊くと、

「もう行っちゃったよ。あたしに会ったら急にかしこまっちゃって。もう少し砕けたお話もしたかったんだけどね。まあ、あの人も歳が歳だから、次元を超えるのはしんどいみたいね。左道家の末裔を見られたから、機嫌はよかったけどね。あんたによろしくって」

最後は左道に向けた言葉だった。

「そ、そうですか。それはどうもご丁寧に」

さて、どうしたものか。私は上司への報告書をどう作るうかと頭を悩ませていた。

「あれ、この子どもかで見覚えがあると思ったら、あーくんじゃないの？ 未だあたしが人形だったときに、おじいちゃんに抱っこされてたでしょう」

「僕の事を知っているんですか？」

「おじいちゃん - 漆黒斎さんは元気？」

「祖父は一昨年他界しました。『耶伽嚙素斗』召喚の悲願を果たせなかったことが心残りだったようです」

「そっか。でも大きくなったわねえ。何年ぶりかしら。ちょっと、近くの茶店にでも行って、お話ししましょうよ」

そう言つと妻は、右手の指をパチンと鳴らした。たったそれだけで、この異空間は消滅し、我々三人は、駅の噴水の前に立っていた。

私も左道も毒気を抜かれて、妻の言いなりである。出張も耶伽嚙素斗封印も、もうどうでも良くなった気分だ。

近くの茶店に入るとすぐ、私は自宅に連絡を取った。こんなところから家まで妻を一人で帰すような恐ろしいことはできない。携帯で葵三尉に迎えに来るように指示を出すと、妻の隣に座った。

「輝久くんを迎えに来るように連絡しておいた。ちゃんとおとなしくして帰るんだぞ」

「ええ」。折角だから二人でデートしようと思っていたのに」

「私は今出張中ということになっているんだ。そんな無理はできない」

「なによ。まったく色気も何もありやしない。この朴念仁が」

「仲、よろしいんですね、お二人とも」

これは、左道暗黒丸である。彼もどんな話をすればいいのか、悩んでるようである。

しばらく雑談をしていると、葵三尉が到着した。

「遅れてすみません。お迎えにあがりました」

「すまないな、輝久くん。家までついてやってくれ」

「了解しました。しかし、ダミーを置いてくなんて、そんなのわかんないっすよ。もう、勘弁してくださいよ」

「いいじゃない。あたしだって、散歩に行きたくなるのよ」

「そう言ってくれば、お供しますよ」

「あゝ、今回はついて来れなくて正解だったな。輝久くんでは、5秒と持たないところだったからね」

「そんなにヤバかったんですか。やっぱ、さすがとしか言いようがないですね」

「それじゃ後を頼む。私はこれから会社に戻らねばならんからな」

「了解です」

私は、3人を残すと、会計を済ませて、車を預けてあるパーキン

グタワーへ向かった。

(15)

この一件から、しばらくは何も無かったの如く、平穏な毎日だった。と、そこへ一通の封書が届いた。差出人は、『左道 暗黒丸』とあった。

今更何だろうと開けてみると、手紙とロックコンサートのチケットが2枚同封されていた。

あれから、左道は自分のバンドを組んでデビューしたらしい。悪魔チックなヘビメタバンドは、数週間でチャートの上位にランクされたそうだ。今度、ライブをやるので見に来て欲しいとの事だった。「父さん、この人達ってすごい有名なバンドなんですよ。そんな人達と知り合いなんだね」

息子が「すごい、すごい」を連発していた。

「またあいつにつき合わされるのかー」

私はため息をついたが、妻は私に「二人で行きましょうよ」と、前回デートできなかった分を埋め合わせさせる魂胆らしい。

何にしても、平和が一番。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4477v/>

すーぱぁお父さん出動

2011年10月26日18時16分発行